

## 刊行にあたって

今、伝統文化の継承が危ぶまれています。その背景としては、地方の衰退や過疎化、少子化による地域共同体の崩壊、文化の多様化等々が上げられます。このことによって、かつてのような神社を中心とした地縁・血縁的結びつきによる文化の継承、島民の娯楽や観光客の鑑賞のための伝統芸能の後継者育成は、難しい状況にあります。しかし、当研究所が目指している佐渡独特の歴史や文化・芸能、多様で豊かな自然などを保存・継承し、活用していくためには、それらを担う地域の人々の力・地域共同体の力がどうしても必要です。その地域に住み、そこに誇りと愛情を持っている人々が健在であってこそ、継承されていくのだと思います。

もちろん、社会は激しく変化しています。したがって、旧来のように地縁・血縁による結びつきだけで地域共同体が形成されるとは限りません。幾つかの集落が結びつく場合もあるし、一島一市になって、旧市町村の枠を越えて結びつく場合も出てきています。例えば、先日小泊公民館で「朱鷺が取り持つ故縁の会」という集まりがありました。この会は、県立文書館の古文書調査をきっかけに小泊村の飛び地である小泊新谷（明治21年下川茂村に編入）の「文化の大絵図」（文化13年に奉行所の指示で約260の村ごとに作成された絵図）に「ときが沢」「大ときが沢」という地名を見付け、その近くに先に放鳥したトキが住み着いているということで、小泊をはじめ小泊新谷・下川茂・羽茂その他から歴史やトキなどに関心のある人々が集まって学習した会であります。ここには、小学生から高齢者までが集まり、絵図と現在を比較しながらの生きた学習が行われました。絵図には、今世界遺産の構成資産に上げられている笹川砂金山に関する「金山江取入口」や江筋なども記入されていて参加者の興味を引いていました。この後、絵図にそって金山江を歩いたり、ときが沢の現地を巡検したりと、活動は発展しそうです。また、赤泊の演劇研究会の人々と松ヶ崎で地域おこしに活動している人々との交流も続いております。このような活動は、他にも多くの事例があり、また、広まっていくものと思われます。しかし、そのような結びつきを可能にするには、そのもとになる調査・研究の成果や資料の収集、あるいは専門的な知識を持ったガイドなどが必要になる場合もあると思います。そのような役割をこそ、当研究所は担うべきだと考えています。

このような趣旨から、本号では、佐渡市博物館協議会長の佐藤利夫先生からは、佐渡における伝統文化とは何かを論じていただき、その形成過程と継承について提言いただきました。県と佐渡市の文化財保護審議会委員の中島栄一先生からは、佐渡市の指定文化財の特徴と現状を明確にした上で、新たな指定や保護する上での課題、その文化財を活用しての豊かな島づくりについて提言をいただきました。同じく佐渡市文化保護審議会委員の伊藤正一先生からは、今まで研究の空白領域といわれていた加茂湖の漁労と狩猟について、聞き取りを中心にまとめていただきました。先生も指摘されているように、このような聞き取り調査は、高齢化が進む今、明日を待てない現状にあることを痛感しています。

三人の先生をはじめ多くの方々のご協力により、「佐渡伝統文化研究所年報」の2号を刊行することが出来ました。調査にご協力いただいたの方々、貴重な資料や文献をご寄贈下さった方々に、紙面を借りて衷心よりお礼を申し上げます。

平成21年3月

佐渡伝統文化研究所

所長 石瀬佳弘